歴史散歩

れきしさんぽ No26

耳納山麓の古墳を訪ねて（1）　国指定史跡　田主丸古墳群（たぬしまるこふんぐん）

久留米市東部に連なる耳納山地。その特徴的な山容から、しばしば屏風に例えられるこの美しい山並みの麓には、現在も様々な文化財が息づいています。その中でも６世紀後半から７世紀初頭を中心に数多く築かれた古墳は、地域の歴史的特性を現す文化遺産として貴重であると言えます。

今回は、耳納山麓の重要な古墳の中で、指定文化財として最も東に位置する国指定史跡田主丸古墳群について紹介したいと思います。

国指定史跡田主丸古墳群は、田主丸大塚古墳（たぬしまるおおつかこふん）・寺徳古墳（じとくこふん）・中原狐塚古墳（なかばるきつねづかこふん）・西館古墳（にしのたてこふん）の４基で構成されます。平成１４年３月１９日に、かねてより国指定史跡であった寺徳古墳に追加指定名称変更というかたちで、指定を受けました。

田主丸大塚古墳（田主丸町石垣）

耳納山麓の標高７０ｍ～８０ｍに位置する、墳丘長１０３ｍ、後円部径６０ｍの前方後円墳です。田主丸大塚古墳は、江戸時代終わりの久留米藩士、矢野一貞が著した筑後地方の総合的な歴史書『筑後将士軍談（ちくごしょうしぐんだん）』に、石垣村大塚として紹介されています。同書はこの古墳について「山邊街道ノ南側ニアリ、當國第一ノ大塚也と云、其窟門ノ所在未タ詳ナラス」とし、古老が語る古墳にまつわる伝承とともに伝えています。その内容から、田主丸大塚古墳が古くから存在を知られ、塚として人々の畏敬を受けていたことがうかがえます。

田主丸大塚古墳全景

田主丸大塚古墳の本格的な調査は、旧田主丸町教育委員会によって、平成５年度より段階的に実施されました。調査の結果、後世の周辺地形の変化によって、これまで大型の円墳であると認識されて来たこの古墳が、実は前方部を南へ向けた前方後円墳（ぜんぽうこうえんふん）であることが確認されました。また、後円部墳丘外周には石垣状の葺石（ふきいし）が施され、高低差解消と墳丘補強のため、石組みを一部墳丘盛土中に埋め込む技術が用いられていることや、墳丘東側に幅１０ｍほどの周溝（しゅうこう）（空堀）が廻る

耳納山麓自然と歴史の森公園
（大塚古墳歴史公園）

ことなどがわかりました。更に、石室の入口部分にあたる前庭部についても位置が確定され、前庭部側壁を約４ｍ積み上げるなど大規模なものであることが確認されました。

築造時期は、埴輪を持たないことや前庭部からの出土遺物から推測して、６世紀後半代と考えられます。古墳時代の北部九州において歴史的な大事件であった「筑紫君磐井の乱」（５２７年）の記憶が残るこの時期に、また、一部を除いて全国的に前方後円墳の規模縮小が進んでいく時期に、大型の前方後円墳がこの地に築かれたことは、当時の政治的環境や地域性を検討する上で重要な意味を持つと考えられます。

久留米市では、この貴重な文化財の恒久的な保存と地域活性化を目的に、周辺部を含めた環境整備を進めています。平成１８年度には田主丸大塚古墳北側の道路を挟んだ隣接地に多目的に活用可能な公園整備を完了しました。古墳本体（史跡指定地）についても適正な保存を目指し検討を重ねて行きます。

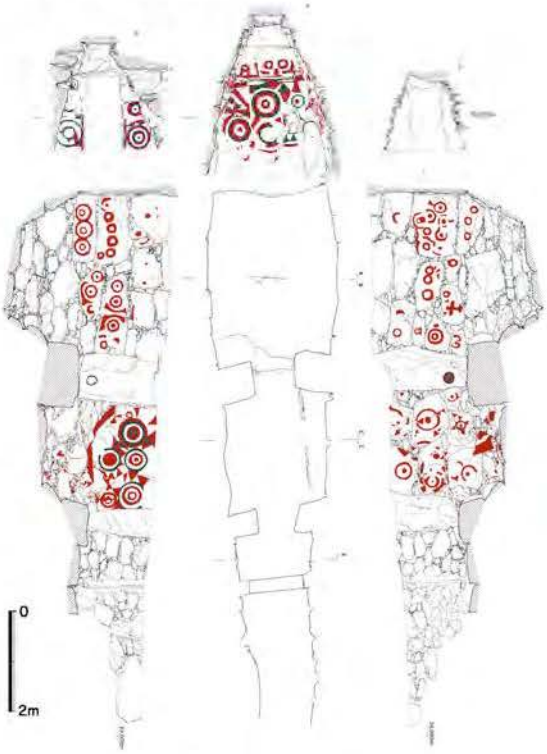
寺徳古墳（田主丸町益生田）

寺徳古墳は山麓の県道沿いに位置する、直径１８ｍほどの円墳です。墳丘は周辺の開墾や墓地としての利用のため大きく形を変えていますが、発掘調査によって墳丘表面には葺石が施されていたことが確認されています。

石室は入口を西側に向ける複室構造の横穴式石室で、全長１０.４ｍほどが残っています。平面形は玄室が側面のやや脹らんだ胴張り長方形、前室は長方形で前室の床面右側には屍床仕切石と見られる板石が４石残っています。玄室は床面が盗掘のためか一段掘り下げられており、敷石等は残っていません。奥壁には幅２.１５ｍ高さ１.８ｍほどの巨石を立てて鏡石としています。

装飾は赤２種と緑の顔料によって玄室奥壁・側壁・玄門袖石・前室側壁・前門前室側左袖石に描かれており、内容は、同心円文を中心とし、三角文・盾・舟？等の図文を周囲に配しています。特に、奥壁と前室左側壁の大型の同心円文は大胆に表現されています。また、奥壁・玄門・前室側壁には複数の色が使用されますが玄室側壁は赤１色で図文が描かれます。

出土遺物は、勾玉・管玉などの玉類、馬具、須恵器が知られており、古墳が造られた時期は６世紀の後半と思われます。



寺徳古墳石室実測図

奥壁の装飾壁画

寺徳古墳奥壁

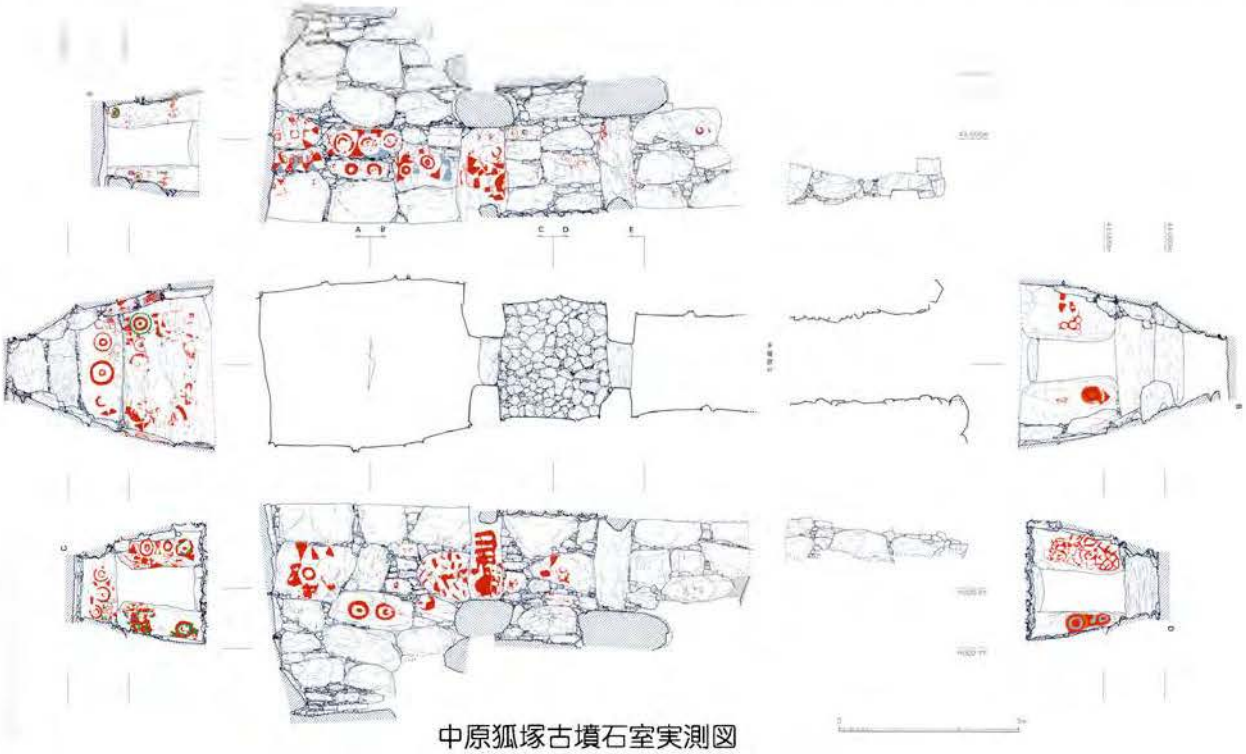
寺徳古墳前室左側壁

中原狐塚古墳（田主丸町地徳）

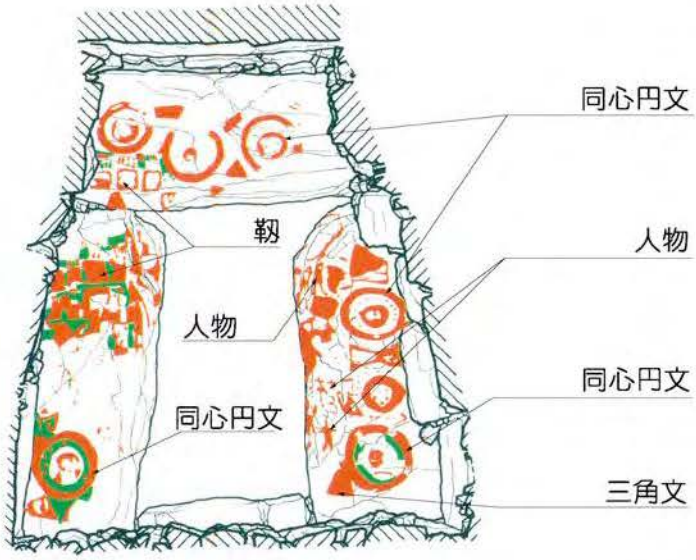
耳納山麓の台地上、標高43m付近のところにあり周辺は果樹・植木畑として開墾され、現状は、墳丘部分がほとんど失われて石材が露出しています。本来は直径19mの円墳であると考えられ、調査の結果、墳丘表面には葺石が施されていたようです。石室は複室構造の横穴式石室で石室全長は11.5m。石積みは、寺徳古墳同様大型の石材の隙間に小礫（れき）を入れ込む方法で、周辺の群集墳に多く見られる手法です。

石室内部の装飾は、赤・緑・青を用い、同心円文を中心として三角文・靫（ゆぎ）（矢を入れる道具）・舟・人物等を壁面下半ほぼ全面に描きます。特に、精緻に表現された同心円文や、数多く描かれた靫（ゆぎ）や人物などの具象的な図文は、耳納山麓の装飾古墳の中でも秀逸で、貴重な文化財であると言えます。

調査の結果、石室内からは多数の鉄鏃（てつぞく）（矢尻）や馬具類、太刀の束の先端部分に取り付けられていた三累環頭（さんるいかんとう）などが確認されました。この古墳の築造された時期は、6世紀の後半であると考えられます。



中原狐塚古墳石室実測図



玄門部の装飾壁画

中原狐塚古墳玄門部

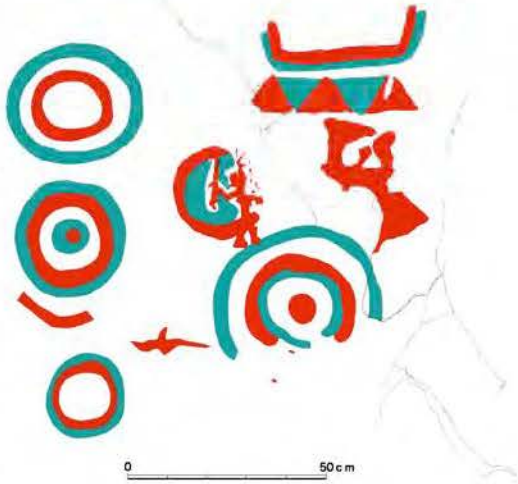
西館古墳（田主丸町益生田）

耳納山麓の中腹、標高１２０ｍ付近に西館古墳は所在しています。墳丘は楕円形をしているため南北に短く最小で１０ｍを測り、二段築成で二段目には葺石が施されています。盗掘のため前室の天井が開けられており、本来の入口は土と礫によって閉ざされていました。

装飾は奥壁と後室の袖石部分のみに同心円文・三角文・人物・舟が描かれています。舟の下の三角文は波を表現したものではないかと考えられています。また、中央の人物は背景の同心円文と重なって描かれ、この部分を詳細に観察すると人物を表現する赤色がその下の同心円文の青とも重なっています。

この古墳の築造された時期は、6世紀の後半であると考えられます。

西館古墳奥壁



奥壁の装飾壁画

田主丸古墳群位置図

周辺の代表的な古墳　**森部平原古墳群（もりべひらばるこふんぐん）（田主丸町森部）**

標高２００ｍ前後の山腹斜面上に立地。周辺は平原古墳公園として整備されており、敷地内に県立ふれあいの家北筑後が所在します。森部平原古墳群は、直径１０ｍ前後の小円墳を主体とする古墳群で現在約７０基が確認されています。石室構造は単室・複室双方あり、概して小規模で奥壁にも比較的小振りの石材が使用されます。平成4年9月2日付けで史跡として県指定を受けています。

各古墳についてのお問い合わせ

文化観光部文化財保護課　0942（30）9225
久留米市埋蔵文化財センター　0942（34）4995

◆　歴史散歩　No26　◆
発行日　平成18年9月　日
発　行　〒830-8520
福岡県久留米市城南町15-3
久留米市文化財保護課